

Title	大和島庄石舞臺の巨石古墳(京都帝國大學文學部考古學研究報告, 第十四冊)
Sub Title	
Author	西岡, 秀雄(Nishioka, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.16, No.4 (1938. 4) ,p.207(705)- 208(706)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380400-0208

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

地位にすら迷つてゐる地理學に對して、いま新たに小牧氏によつて先史地理學といふ分野が展かれた。それは學界にとつて確かに一つのセンセイショナルな事件であらねばならぬ。先史地理學といふ表題をみる者は、先づ第一にそれが果して學問として成立し得るであらうか、果して成立し得るとすれば、然らば如何なる目的を有し、如何なる任務を擔ふものであるかといふ疑問を抱くであらう。そこで著者小牧氏は先史地理學の實際的研究の成果を展示する前に、豫めそれが學問として立派に成立し得るといふ理論的根拠を示す必要を感じられた。即ち本書を二部に分ち、その第一部を以て「先史地理學の理論」となし、こゝに先史地理學の理論的構成を論述する。著者は先づ第一に地理學の史的発展を回顧しつゝ、その對象を規定して統一的全體としての、景觀の意義に於ける土地地域であるとなし、又その方法に就いては、空間的擴がりをもつ土地・地域に就いて、土地・地域内の諸現象、即ち地域構成または景觀構成の全要素を、相互關聯的に、統一的全體的に見るものであると説くのである。即ち著者は地理的環境論や地理的史觀を以て眞の地理學的成立の所以に非ずとしてこれを斥け、飽くまでも景觀の意義に於ける土地地域を以て地理學の對象となし、自然・人文諸現象を景觀構成の要素として全體的に把握することを以て地理學の本質的任務とするのである。斯くの如く地理學の本質を決定したる後、著者は更に歴史地理學に論及し、地理學は現在及び過去に於ける自然現象・人文現象の構成する統一的全體としての土地・地域（景觀）を描出することであり、その過去に互るものが即ち歴史地理學を構成すると説くのである。

書評

即ち歴史時代の或る断面に於ける土地・地域を説明敘述するものが歴史地理學であるとなし、従つて歴史時代の一断面として先史時代をとれば、即ちそこに先史地理學が成立し得るとするのである。この間路整然として完璧なる先史地理學の理論的體系が打ち立てられてゐる。斯の如き體系を與へる爲に著者は本書の約三分の二を費してゐるが、それは地理學そのものが、今日尙ほその對象や方法に就いて確定不變のものが與へられてゐない證據であらう。斯の如き理論的根拠の下に第二部の「先史地理學的研究」に於て、「越後及羽後海岸平野の研究」、「河内平野の研究」及び「出雲平野の研究」の三篇が論述されてゐる。第一部の理論篇に對して第二部の研究篇がその分量―單に分量だけではあるが―に於て聊か物足らぬ感もないではないが、然しこの種の研究は考古學研究と並行すべきものであり、考古學研究の頗る困難な實狀から見れば、此の種の先史地理學研究を多く期待することは不可能であり、寧ろ珠玉の如き是等の論篇に心から敬意を表すべきであらう。蓋し本書の出現によつて先史地理學は科學の系列の中に不動の地位を獲得せりといふべく、本書に於て提唱された研究法は必らずや我が地理學界に一新機運を導く源となるであらう。

（京都市、内外出版印刷株式會社發賣）（有賀春雄）

大和島庄石舞臺の巨石古墳

（京都帝國大學文學部考古學研究報告 第十四冊）

大和國高市郡高市村大字島ノ庄の石舞臺は、先年埼玉縣北埼玉郡太田村大字若小玉字保井に於て發掘せられた古墳と同じく、其

の封土を失つて石室構築の全形を殆ど裸出し、嘉永元年に出た西國三十三所名所圖會にも既に記載せられた著名な巨石古墳にして、當古墳に對しては過ぐる昭和八年及び昭和十年の二回に互り、日本學術振興會の援助に依り京大文學部考古學教室及び奈良縣史蹟調査會とは共同調査を行つたが、本書は其の待望の調査報告である。

内容は濱田耕作博士が大和島庄石舞臺の巨石古墳と題して、古墳内外の構築より石室内外に發見の遺物に關し細述し、石舞臺西北の小古墳にも注意を怠らず、考説の章に於いては石舞臺を方形墳の範疇に入れ、其の築造法より築造年代に論及し西紀六七世紀頃と歸結し、最後に被埋葬者の問題をも取上げて、『當古墳を歴史上の一定の個人の墓に擬定せんとするならば蘇我馬子の桃園墓とする説を以て最も有力なる假説とする外はないであらう。』と結んで居る。

更に附録には高橋逸夫氏の石舞臺古墳の巨石運搬法並に其の築造法と題して、力學的立場より興味ある一應の推論を試みて居り、又、斯學研究者にとつて便利なものとして、梅原末治氏の日本古墳巨大石室聚成及び日本方形古墳聚成がある。

本書は本文八十七頁・英文九頁・玻璃版圖版四十五葉・原色版・別刷圖版・聚成圖數葉・四六倍版洋装にして、とにかく大規模な高塚古墳として其の石質内に完備せる排水施設あり、而も空渾と外堤とを有する方形墳を取扱つた調査報告なだけに、種々示唆に富むは論を俟たない。

石室構築に於ける石材構築法の問題を取つて見ても、棋式(chess)

(ched system)を採用せずして楯式(intel system)に一貫せる我國の墓室は、玄室を擴張せんがためには巨石の必要を生じ、殊に本古墳の如きは、上部天井の壓力を外方にレリーズせしむ可き目的の爲め、玄室兩側壁に於ける中段の石に甚だ奥行あるものを使用して居る等は頗る興味のある所である。

最後に本書は濱田耕作博士の直接關係する最後の報告との事にて、大正六年以來既に十四冊の貴重な研究報告を學界に送つて來て居る京都帝大文學部考古學教室の絶えざる活躍に對し敬意を表すると共に、吾人は博士去るとも同教室の今後の努力を斯界の爲更に期待してやまぬ者である。

(昭和十二年十一月廿五日西岡秀雄)

響堂山石窟

(東方文化學院
京都研究所刊)

本書は東方文化學院京都研究所の水野清一・長廣敏雄の兩氏が昭和十一年三月より五月にわたる北支那旅行中調査された響堂山石窟に關する報告である。響堂山は一名鼓山とも云ひ、河北省磁縣・河南省武安縣にわたつて南北に走つて居り、本書によるとその南部(河北側)には東魏の作かと思へる佛龕、二層に分れた七箇の北齊の洞窟、及び唐の洞窟があり、その間に散在して隋・唐の小佛龕が存在し、北部(河南側)には北齊の洞窟三箇、唐・宋・明の洞窟各一が開鑿されて居ること、本書にはそれら全般にわたつてなされた綿密な調査及び考察が發表されてゐるのである。